一般研究・共同研究

オックスフォード運動の文学への貢献
——John Keble の場合——

内　藤　史　朗

オックスフォード運動を文学との関係で述べる場合、文学と対立する宗教運動として捉えて述べることが多かった。最近も Thomas Hardy とオックスフォード運動との関係を指摘した論文[1]が発表されたが、これも、その枠から出るものではなかった。

現代詩人 Yeats をも射程に入れて、オックスフォード運動の契機をつくった詩人 John Keble（1792—1866）を考察すると、後の英文学への貢献として評価されるべき点がある。この点について示唆できれば幸甚である。

Keble は、文学の基本的ジャンルは、抒情詩ないしは悲歌（elegy）と考えた。Virgil のような詩人にとって primary なジャンルは悲歌であったが、主体の primary な表現をするのに邪魔になるはずの叙事詩（epic）というジャンルに挑戦することによって、主体はたんに primary な表現であることを超えて、透明になる。聴衆ないしは読者と作者の間に「透明な薄膜（ヴェール）」[2]が挿入されることになる。

Virgil の叙事詩においては、作者は、作者の主体に無意識であると Keble は考えた。そのことは「透明な薄膜」と表現された。

Keble は、この透明さに到達するためには、邪魔が必要であり、この邪魔を克服する際に作者は主体に無意識になると考えた[3]。

Yeats の晩年の詩 “The Black Tower” に、鈴木大拙の「透明」の思想が表現されていることは、拙著において指摘した通りである[4]。Yeats の場合の「透明」

は、Keble の「透明な薄膜」という convention を踏まえて見直してみると、前世紀のキリスト教詩人の考えと、現代詩人の東洋思想の接点が見えてくる。

大拙の「透明」の思想は、「無我」の思想であるが、Yeats は、「無我」の中に Daimon の「純粋な行為」('pure act'[5]) の境位を見出した。これは、Yeats が、「心の中に神を見出した[6]」禅に魅せられた結果の到達した認識であった。

一方、Keble は、前世紀において、キリスト教の枠内で、心の中に神を見出した詩人であった。次の Keble の詩行は、内在の神を証ったと解釈できる。

'What word is this? Whence know'st Thou me?'
All wondering cries the humbled heart,
To hear Thee that deep mystery,
The knowledge of itself, impart.[7]

「これはいかなる言葉か。いずこより
汝は私を知っているのか」と、
恐れ入った心は訝って呼ぶ、
あの深い神秘である汝が
自らの認識を分け与える声を聞くために。

(試　訳)

Keble にとって、自然と聖書は共に聖典であり、それらは、魂が自らの物語が書かれているのを見出す記録でもある。自然（人生を含む）と聖書の中に神の声を聞こうとしたと言ってもよい。

上に引用の詩行について、次のような解釈がある。

「'deep mystery' なる句が、'Thee' と同格ならば、両方の聖典（自然と聖書）

の中で、Keble が読み取った 'mystery' はまず神の本性である。しかし、彼の主体の神秘にふさわしいのだが、Keble は syntax を開いたままにしておく。中枢の句 'deep mystery' は 'humble heart' を modify すべく逆戻りすることもできるから、神の伝える認識は、神自身の判読ではなくて、『内部の神秘的天』の判読であり得る[8]」

「内部の神秘的天」は次の詩行に見られる。

Two worlds are ours: 'tis only Sin
　Forbids us to descry
The mystic heaven and earth *within*,[9]

二つの世界はわれらのもの。
　内部の神秘的な天と地を見出すのを
妨げるのは、原罪にほかならぬ。

（試　訳）

「内部の神秘的な天」とは、「心の中の神性」のことである。

先に引用の詩行において、'that deep mystery' に modify される 'the humbled heart' は、神性の内在する心のことである。Keble は、内在の神を認識したのである。キリスト教の枠内における内在の神の認識は、Yeats が禅に見出した内在の神と符合するのであり、英詩の流れの中の一つの底流であることは間違いあるまい。

両者の直接の影響は立証のしようがなく、そんな作業は不毛であるが、Keble がオックスフォードの詩学の講義で重視した Virgil や Lucretius をYeats は読んでいるという事を指摘しておく[10]。だが、それよりも、現代詩人達が影響

を受けた前世紀の詩人でオックスフォード運動の当時、同大学の学生であり、宗教的にもその運動の影響を受けカトリックに改宗した G. M. Hopkins を経由し、さらには John Ruskin をも経由して、(Walter Pater も経由して) Keble は、Yeats へ影響したことも考えられる。

Hopkins や Ruskin は、自然や人生における経験の中に神性を見出したと筆者は考えているが、これは、「精神的洞察力を経験心理学の体験につなぎとめておこうとする傾向[11)]」と言えるのであろう。そして、この傾向こそ、「経験の類比 (analogy)[12)]」である。

Keble の *The Christian Year*[13)] という詩集の中に、すでにこの傾向を見出すことができる。

例えば、"Third Sunday after Epiphany" で、詩人は虹を指して謳っている。

It was a gleam to Memory dear,
  And as I walk and muse apart,
When all seem faithless round and drear,
  I would revive it in my heart,
And watch how light can find its way
To regions farthest from the fount of day.[14)]

それは、記憶の中でいとおしむ輝きであり
私が歩いてひとり黙想に耽りながら
周囲のすべてが不実ですさんで見えても
私の心の中でそれを蘇らせて
日出ずる処から最も距った地域にまで
いかにして光は到達できるかを

私は見守りたい。

（試　訳）

さらに、都市と田園について詠った“St. Matthew”ではこう詠っている。

Then be ye sure that Love can bless
Even in this crowded loneliness,
Where ever-moving myriads seem to say,
Go–thou art nought to us, nor we to thee–away![15]

「おまえは我々になんの意味もなく
我々もおまえにとってそうであるから
立ち去れ！」と不断に変動する万象が
言っているような、この雑踏の淋しさの中でも
慈悲深き神は祝福し得ることを確信せよ。

（試　訳）

有為転変の万象とその中に秘められた神への信仰は、Hopkins になると、‘inscape’と‘instress’という造語を生み出すことになった。‘inscape’は感覚で捉えられる「個別的特殊的な（事物の）質[16]」であるが、‘instress’は魂で捉えられなければならない、「あらゆる事物が支えられその存続の努力をつづけるところのあの存在の力もしくはエネルゲイアのことである。[17]」「インストレスは詩人にとってインスケイプを統一する力とみなされるものであることがわかる。さらには、インスケイプが知覚の働きにおいてまず知られ、こうしてインスケイプを把握する際にその背後にある存在の力、つまりインストレスが感じ

られるということもわかる。[18]」

Hopkins の 'inscape' は、Ruskin の Penetrative Imagination の影響であることを指摘し、その Penetrative Imagination の顕著な特徴を、Hopkins のソネット "Pied Beauty" における非常な強烈さと融合にあるという説がある。[19]

All things counter, original, spare, strange;
Whatever is fickle, freckled (who knows how?)
With swift, slow; sweet, sour; adazzle, dim;
He fathers-forth whose beauty is past change:
Praise him.[20] ("Pied Beauty")

よろずのものは互いにさからい、自らなる
価値を持ち　はみ出し　斬新さを帯びる
うつろい行くすべてのものは（どのように
かは誰が知ろう？）
迅さとおそさ甘さとすっぱさまぶしさと
薄暗がりの斑模様に織りなされ
それらすべてを創り給いしはその美しさ
いつも変らぬかのお方
かの人を讃えまつれ[21]　（緒方登摩氏訳）

この詩は、「雑踏の淋しさの中で神の祝福を確信せよ」という旨を謳った Keble の詩と軌を一にするところがある。それは、多と一を洞察した点である。Yeats になると、一即多の禅に存在の統一の原理を見出したと考えられるが、Keble, Hopkins はともにキリスト教の枠内で、多と一の関係を謳っている。

多に秘められた一を見出すことは、万象に秘められた神性を洞見することにもなる。この洞見は、Ruskin では Penetrative Imagination の働きであり、Hopkins では 'inscape' という造語を生んだ。そして、この両者は、アリストテレスの Imitation と Expression の一致した理論に符合している。[22)]

「アリストテレスの詩人はたんに刺激に対して反応するものではない。反応に対立する行動は観察者に想像することを要求する。[23)]」

「想像することによる行動」こそ Imitation がたんなる反応に終わらずに Expression になることを示す。実は、Keble や Newman のようなオックスフォード運動の詩人達は、このアリストテレスの理論を踏まえていたのである。[24)]

Hopkins は，"The Wreck of the Deutschland" の第18連で、難破船の中で立ち上がって群衆に語る「背の高い尼僧」の心中を想像して、アリストテレス的な Imitation で詠っている。

Ah, touched in your bower of bone
Are you! turned for an exquisite smart,
Have you! make words break from me here all alone,
Do you!—mother of being in me, heart.
O unteachably after evil, but uttering truth,
Why, tears! is it? tears; such a melting, a madrigal start!
Never-eldering revel and river of youth,
What can it be, this glee? the good you have there of your own?[25)]

ああ　おまえは肋骨の中に包まれて
いるのに
手を触れられたのか！言いようのない

激しい痛みで
もだえたのか！ここにただ一人いる
私からむりやりに言葉を
吐き出させようとするのか！――私
のうちにある存在の母よ　心よ
ああ　おまえはどうしようもなく悪を追
い求め　しかも真実を口にする
どうして涙なんか！ほんとうか？そうだ涙だ
それほどに心溶け甘美なときめきを
感じているのだ！
いつまでも果てることのない悦びの宴(うたげ)よ
若さにあふれる河よ
いったい何だろう　このよろこびの声は
それはおまえ自身の心の
正しさなのか？[26]（安田章一郎氏訳）

この連で突然、詩人は一人称を用いる。内容から見て、これは「背の高い尼僧」が自らを指しているのである。詩人は想像することによって、尼僧の行動を模倣している。アリストテレス的模倣（Imitation）である。

そして、‘inscape‘ から ‘instress’ へまで高まって来る。感覚の世界から霊の世界にまで行きついた尼僧の心境を謳っているのである。霊の世界から湧き出て来る「悲劇的悦び」を筆者はここに見る。この Hopkins の「悲劇的悦び」は、Yeats のそれを想起させる。前者はキリスト教的枠内の神への帰依からの悦びであるが、Yeats のように東洋の詩人カビール（Kabir）の神や禅思想にまで通用するような絶対者に拠り所を求めた悦びに通じているのである。もちろん、

詩という領域においては、両者は相通じる働きをするのである。

悲劇の中にあって悦びを感じる者は、現象の悲劇的地上で、その洞見によって、天国のイメージを見る。21連にそれがある。

in thy sight
Storm flakes were scroll-leaved flowers, lily showers–
Sweet heaven was astrew in them.[27]

あなたの前では乱れ降る雪も
渦型の花弁の花　百合吹雪となって—
甘美な天がその中に撒かれていたのだ[28]

（安田章一郎氏訳）

「背の高い尼僧」にとっても、詩人にとっても、難破船に吹きつける吹雪は、「百合吹雪」に見えたことであろう。

自然や人生の経験の中に神の姿を見、神の声を聞こうとすることが、絶望の中で試みられている。それがこの詩作の目的であったと考えられる。

絶望の真只中での信仰の確認は、「経験の類比の一例」であって、Keble から Hopkins を通って、Yeats にも、その類比は見られる。

Yeats は恋愛や独立運動という経験の中でその宗教性はキリスト教の枠を超えて、東洋の宗教にまで通じるものになって行った。いや、Yeats は始めから異教的——彼の場合はケルト的——であったという見方もできよう。

だが、筆者がオックスフォードに滞在中に知り合った文化人類学者[29]は、オックスフォード運動は、「ケルトの運動」（'Celtic Movement'）だと言うのであった。その詩人の多くが Celt 系の血筋を引いていたことだけでなく、「経験の類

比」を詩で表現する場合、Celtic と見られる要素が出て来るのではないか。キリスト教の衣を着ていても、本質は Celtic だと、かの文化人類学者は指摘しているようであった。こう考えて来ると、Keble—Hopkins—Yeats の流れ——ことにその宗教詩的流れ——が理解され易くなる。

Keble などのオックスフォード運動の詩人達の宗教性は、ケルト的と言われるほどにまで「経験の類比」に徹し、そのことによって、本源的な宗教性にフィード・バックしたのではなかったか。ことに Keble のようにローマン・カトリシズムに帰依しなかった詩人の場合、その点が徹底していたように思われてならない。Hopkins は、カトリックに改宗したとはいえ、現代詩人に通じるような「経験の類比」が見られる。彼の場合は、経験を極限の状況において、神への信仰の深まりを示した。やはり、この場合も、より本源的な宗教性にフィード・バックしたのであった。

Yeats は、キリスト教徒が、カトリックとプロテスタントに分かれて争い合う祖国アイルランドの政治的状況の只中にあって、本源的な宗教性にフィード・バックしようとした。その際に、東洋の宗教に通じる宗教性が出て来たのではないかと筆者は考えている。

少なくとも、Keble の場合は、本源的な宗教性へのフィード・バックがあったと考えられるのであり、ここに、オックスフォード運動が宗教的なフィード・バックを意味していたし、文化的にケルト的運動と言われる理由もここにあると考えられる。

そして、フィード・バックになり得たとすれば、その原因は、Keble など運動家達が詩人であったということにあると考えられる。

自然や人生の経験の中に神の声を見、聞きしようとすることは、神の意味も広げることになったのであろう。

文学性が宗教性に広がりをもたせたと言ってもよい。そして、広がりをもっ

た宗教詩は文学の伝統の中に、Wordsworth の詩 “Tintern Abbey” に見られる「経験の親比[30]」を、主要な底流として根づかせ、現代詩人 Yeats にまで到ったと言えるのではないだろうか。

文学性が宗教性を豊かにし、宗教性が文学性を根深いものにしたと言ってもよい。

「文学への貢献」は実は、「文学からの貢献」に依っていたのである。

結びに代えて、Keble の詩の一節を引用する。この詩行は、若き日に Keble に魅せられた T. S. Eliot の回心の動機づけ[31]を想起させるものである。

The trivial round, the common task,
Would furnish all we ought to ask;
Room to deny ourselves; a road
To bring us, daily, nearer God.[32]

日常茶飯事やありふれた仕事は、
われらが求めるべきすべての事――
われら自身を否定する機会や
毎日われらを神に近づける道――を
与えてくれるであろう。

（試　訳）

注

1）藤田繁「ハーディとオックスフォード運動一聖サイラス教会」（『英語青年』1987年9月号所収、研究社）

2）W. David Shaw, *The Lucid Veil—Poetic truth in the Victoridan age* (London: Athlone, 1987), p.68.

3）*Loc. cit.*
4）S. Naito, *Yeats and Zen* (Kyoto: Yamaguchi, 1983), p. 71.
5）*Ibid.*, p.50.
6）*Ibid.*, p. 131.
7）　J. Keble, *The Christian Year* (London: George Routledge and Sons, 1874), p. 266.
8）W. D. Shaw, *op. cit.*, p. 193. My translation.
9）J. Keble, *op. cit.*, p. 63. (Emphasis added.)
10）筆者所蔵の Keble の講義の英訳のマイクロフィルムに拠る。
11）ノースロップ・フライ著出淵博也訳『批評の解剖』（法政大出版局、1980年）212頁。
12）Loc. cit.
13）7）を参照せよ。
14）J. Keble, *op. cit.*, p. 48.
15）*Ibid.*, p. 269.
16）安田章一郎著『G.M. ホプキンズ研究』（清水弘文堂、1983年）64頁。
17）*Ibid.*, p.66.
18）*Loc, cit.*
19）W. D. Shaw, *op, cit.*, p. 241.
20）Michael Roberts (ed.), *The Faber Book of Modern Verse* (Faber, 1936), p. 61.
21）安田章一郎・緒方登摩訳『ホプキンズ詩集』（春秋社、1982年）135頁。
22）W. D. Shaw, *op. cit.*, p. 243.
23））*Loc. cit.*
24）*Loc. cit.*
25）M. Roberts (ed.), *op. cit.*, p. 53.
26）安田・緒方訳、前掲書、105- 6 頁。
27）M. Roberts, *op. cit.*, p. 54.
28）安田・緒方訳、前掲書、108頁。
29）1981年当時、オックスフォードのフェローであった E. Ardener のこと。
30）N. フライ著出淵他訳、前掲書、212頁。
31）Lyndall Gordon, *Eliot's Early Years* (New York: Oxtord University Press, 1977), p. 121.
32）Keble, *op. cit.*, p.3.